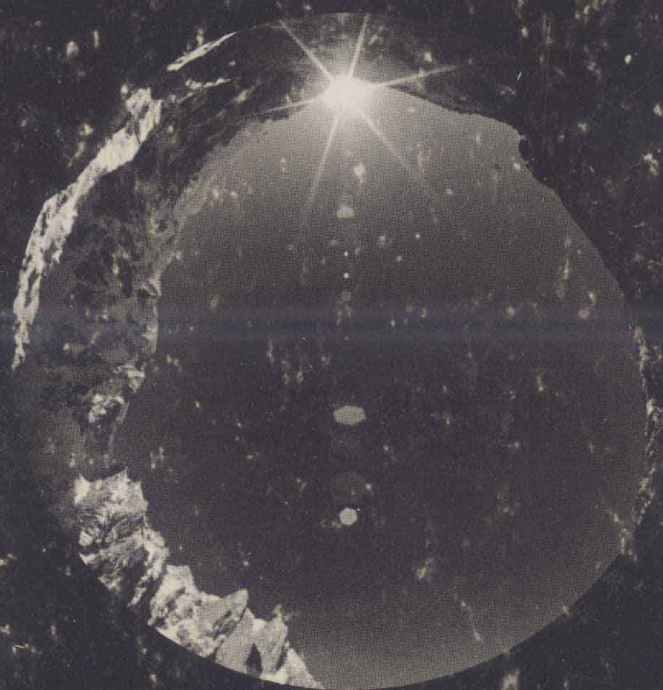




K12峰遠征記

K12峰遠征記

岩坪五郎編



中央公論社

K 12 峰遠征記

昭和五十一年九月二十日初版印刷
昭和五十一年九月三十日初版発行

©一九七六

編者 岩坪五郎
発行者 高梨 茂

印刷 三陽社
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目

電話五六一―五九二一

振替東京一三四

検印廃止

追憶——序にかえて

岡 本 道 雄

京都大学医学部学生高木真一君と工学部卒業生の伊藤勤君の二人は、一九七四年八月末カラコラムの高峰K12を征服し、その帰途音信を絶った。

かねてから本学の山岳部を形成しているこれらの人達の明るい美しい心情に共感を持っていた私は、その計画の当初から何とかしてこの登頂が成功するようにと希っていただけに、六月三十日の壮行会を以て送り出した一行のその後については常に関心を持っていた。

特に八月末を迎え、その成功の朗報を今日か今日かと待望していた頃、壮行会における岩坪隊長の「私共は決して焦りません」と言った言葉がくり返し思い出されたのは、何か予感するものがあったのであろうか。

十月初め朝の総長室で岩坪隊長からこの二人が登頂に成功後、帰途氷雪の大斜面を横切る道程で音信が途絶えるまでの経過の詳細を聞いた時は、私の心も亦凍ってしまふように感じたのであった。トランシーバーを通じての隊長と二人の間の会話は、まさに一生を一瞬に凝集したものであった。

隊長の言葉はこれまでの一生の山での体験の凡てに裏付けられた現況に対する判断と、同じく意識されないにせよ大きい責任感とがこの一瞬に渦まいたに違いない。

二人は亦、肉体の限界においても尚、思考力の凡てをしぼってその情況と戦ったことであろう。

しかし自然は、特に大きい自然は時にこれら人間の計らいとは、スケールとレベルの違った次元で応えることがある。個々の人間の驚き、悲しみ、怖れと言ったものを悠久の自然の一瞬として、大氷原は凡てを白く静かに覆ってしまったことであろう。

昔の高校の寮歌に「真理の道のみどり児が天の調べに歌いけむ瞳に夜の輝きは」と言うのがあったが、人智の限りを尽しても大きい自然の営みからすれば我々は凡てのみどり児であろう。

共に才能に恵まれ、良い環境に育ち、山に美しい憧れをいだき、そしてその懷に永遠に眠った二人の美しい瞳は、私共の心にはいつまでも生きて輝いているが、同時に尽きない悲しさを如何ともし難いのである。

しかし私共はいつまでも悲しみに止まっている訳にはいかない。山への憧れが人間にとって本質的なものである限り、今後も続くであろう多くの人々のために、あの一瞬を招来した多くの条件を分析し検討を重ねよう。これが山登りの人達のこれまでであり、またこれからの道でもあろう。

(京都大学総長)

K
12
峰
遠
征
記

目
次

追憶

岡本道雄

I

K12 登頂・遭難

岩坪五郎

9

K12 登山と食糧

奥哲

121

ヒマラヤ登山と心電図の変化

斎藤惇生

157

K12 の気象

金山清一

197

カラコラム地質調査の旅

能田 成
231

ゴマ村診療所にて

岩坪 玲子
265

診療を通じて考えたこと

川合 仁
319

あとがき

中島暢太郎
359

口 絵 C2付近よりみたK12峰

地 図 カラコラム東部概念図

K12付近概念図

装幀 熊谷博人

K
12
峰遠征記

故 高 木 真 一
伊 藤 勤
君に捧ぐ

K
12
登頂・
遭難

岩
坪
五
郎

とにかくいのちをたいせつにしなければならぬ。すべて生物は、それを原点にし、またそれに帰結する。二人の若い仲間を失ってしまった今、痛恨のうちに、わたしは敗軍の将として兵を語ろうとしている。なくなった二人が登頂したK12への遠征のありのままを報告することは、生きて還ったわたしたちの果すべきかれらへの務めであらうし、またわたしたちの隊を支援してくださった方々への義務でもあると考えるからである。

したがって、この報告にはなるべくやみくもに懺悔したり弁解じみたことは、書かないようにしようと思う。わたしたちが、何を志し、それはどう展開しました失敗していったか、そのときわたしたちはどうしていたか。そして、わたしが再び同じような立場におかれたとき、どうすればうまくやれると考えているか。それを書きたい。

もし、この報告が、これからおこなわれる登山を輝かしい成功に導くためにいくらかでも貢献できれば、それはなくなった二人への供養であり、わたしたちへの救いであると考ええる。

隊の成立

うちつづく遭難のなかで

一九七三年五月十四日、わたしたちの親しい仲間、松田隆雄と上田豊は、京都大学学士山岳会（A A C K = Academic Alpine Club of Kyoto の略。旅行部・山岳部 O B を主体とした集団）の遠征隊員として、ネパール東部のヤルン・カン（八五〇五メートル）の頂上に達した。初登頂である。しかしその帰途、一晚のビバーク（不時露営）ののち、松田はヤルン氷河に姿を消した。さらに八月六日、こゝろは山岳部の現役部員の栗屋君が、北アルプス北又谷で転落死亡した。

九月二十二・二十三日、ヤルン・カンの報告検討会が京都で開かれ、登攀指揮における状況判断の問題、とくに極限状態における「おもいこみ」のこわさがうきばりになった。つまり、いちどこれといけると計画をたててしまったら、状況に応じての修正がたいへん難しくなる。

この遠征隊の留守をあずかった仲間としてのわたしの個人的総括はこうだった。「登山に必要なのは柔軟な判断力、思考力だ。それはしょっちゅう山へいき、経験を重ねることによって、はじめて身についたものになる。文献的研究はもちろん必要ではあるけれど、それだけではだめだ。わたしたちは一九六二年、A A C K のサルトロ・カンリ（七七四二メートル）、一九六四年、京大山岳部の

ガネツシュ(七二五六メートル)遠征以後ヒマラヤの経験をもっていないし、ヨーロッパのガイドたちのような山行日数もない。貴重な仲間をヒマラヤで失ったけれど、八〇〇〇メートルを経験した数人の若い仲間たちをえた。かれらを核として、つぎつぎと新しい峰をめざすことが、わたしたちの実力をのばし、よい山登りを果す唯一の途ではあるまいか」

ヤルン・カン遠征に参加した二人の京大山岳部員高木真一と松沢哲郎は、帰途パキスタンにたちより、フンザからバス氷河に入って、バスター峰(またの名をシスバレ、七六一九メートル)の偵察をしてきた。処女峰であり、カラコラムの真青な空に鋭く白くそびえる秀峰である。山岳部ではこの山に遠征隊を送るべきかどうか、遭難のあとであり、そうとうもめたようだ。しかし行動のないところ進歩はない。パキスタン政府の許可をえられるかどうかは、わからないが、前進が決定された。

カラコラムへいこう

十月末、山岳部員たちは隊長になることを、わたしに要請してきた。すでに二、三の先輩にあたって断わられたという。わたしが断われば、困難な状況のなかででてきた若い人たちの意欲を、わたし自身がつみとってしまうことになりそうだ。それはまた、ヤルン・カンの報告検討会でのわたしの総括を、自らやぶることになる。わたしは四十歳、来年はいわゆる「本厄」でちょっと気になるけれどいかずばなるまい。山岳部長の小野寺幸之進教授と、わたしの所属する研究室の教授でAACK会長の四手井綱英教授の承認をえて、引き受けた。

ただちに、パキスタン政府への登山許可申請書の作成にとりかかる。これが実現すれば、わたしにとって五度目のパキスタン行きとなる。第二の故郷に戻るような気がする。それにわたしが名を連ねた申請で、断わられたことは一度もないという変なジンクスを、わたしは信じていた。

登山の申請するのに、許可をもらえるならどんな山でもよい、というわけではない。自分の登ろうとする山に、わたしはいちおうの基準、このみの基準をもっている。まず、ヒマラヤへいく以上、未踏峰でなければならぬ。たいへん少なくなったとはいえ、まだヒマラヤには未踏峰があるのだから。標高は高いほうがよい、山登りとは高いところに登る行動である。登る以上、姿のよい山であってほしい。みるからに怪奇なのや、隣の大きい山にへばりついたような、しょぼくれたのはこのましくない。最後に、わたしたちにとって登頂の可能性のあることが必須条件である。もちろん登山は、やれば必ず成功するというものではない。多くの幸運にめぐまなければならない。しかし可能性があるかどうかは、おのずとわかるものであるし、わからなければならない。それを誤まれば登山は失敗する。

申請書の形式は、第三志望まで書くことになっている。わたしたちの山登りの基準にたって、総合的判断をしたのち、第一志望はシスパレ（パサー）。いささかむつかしそうだが、フンザ・カラコラムの秀峰である。第二志望をK12（七四七三メートル）にした。K12はわたしたちにとって、久恋の山である。一九六二年、サルトロ・カンリにいったときまぢかに眺めていい、あれに登ろうと何度も申請をだした。しかし、一九七一年に千葉県の市川山岳会が許可を取得し、この山の北西の

コル（鞍部）まで達している。そんなわけで、本当は第一志望にしたかったのだが遠慮した。第三志望は、あまり気はのらなかったがいちおうフンザ谷をへだててシスバレの向い側にあるルPGA・サール（七一九メートル）とした。さいわい第三志望に許可はこなかったが、これはいささか無責任な態度であったと反省している。

一九七三年十一月二十日、わたしは東京にある駐日パキスタン大使館に申請書を提出した。京都への帰途、東海道新幹線「ひかり」の自由席で、来年登山許可がくるまでにしておくべき仕事を考えていた。サルトロ・カンリのときのパキスタン側の隊長ベグ教授と、副隊長のハイヤット・アーマッド・ハーンさんに手紙をだそう。あのチョタワラ（ちんびら）が、とうとうバラ・サーブ（大旦那隊長）になったかと喜んでくれるだろう。シスバレの写真をもうすこしほしい。一九五六年、パツラ地域にはいった国際隊の植物地理学者に頼んでみよう。装備類の注文など外部への働きかけは、正式許可がくるまでいっさいしないでおこう。そのかわり、許可がきたら直ちに動きだせるように、下準備は確実にしておこう。車窓から見る富士山は完全に雲におおわれていた。

この日の夜、恐ろしいことがおこっていた。北アルプスの槍平から槍ヶ岳にむかう途中、猛風雪のなかでテントを張った京大山岳部のパーティが、深夜なだれに襲われ、五人の部員が死亡した。山岳部では今後どうやっていくか、真剣な論議が続けられ、カラコラム遠征の準備はどこかにいつてしまった。このような状態で遠征の話をもちだすのは混乱を深めるばかりだし、わたしは沈黙を